

こころ日記 「ぼちぼち」 part II

思い出ポロポロ

脇野 千恵

自身の塾のことをお話しましたが、正直ぼちぼちでした。経営には向いていないようで、せつかく引き継いだ仕事でしたが、3年ほどして閉店することに。当時、塾生の保護者から学校の不満をよく聞きことがあり、「今、学校はどないなってんの？」

という思いが湧いていました。家の事情で教員を断念した苦い経験がありましたが、正直やっぱり、また学校に戻りたいなという思いが募っていました。

— これも大事な仕事 —

今、教員採用試験を受験する年齢制限は、どの行政も45歳位まで引き上げられています。最近、私の友人は、臨時講師という冷遇された働き方から耐え切れずに、年齢制限50歳までの〇市の試験を受け、見事合格し再就職を果たしました。「教諭」と言う職にこだわるって、

そういうことなのかと感心したものです。

私が住む県は、30年前の採用試験の受験資格は30歳まで。「教諭」への転職はあきらめました。とりあえず、臨時講師として登録をしました。

すぐに、某学校から連絡がありました。しかし、教員志望のはずが、依頼内容は学校事務の仕事でした。「教職員の給与が払えず困っているので、助けてほしい」との趣旨でした。

小学校の教頭は、電話口で本当に困った様子で、何とか引き受けてくれないかと懇願されました。久しぶりの学校現場です。社会復帰のステップとして、いきなり教壇に立つ前に…まあいいか？と引き受けることにしました。新採の18歳の事務職員が、

たった1か月で辞めてしまったとのこと。事務職という仕事は、学校の要です。特に、高等学校の事務職は、管理職並みに学校を動かす

力があり、予算執行など教育現場にとっても影響する職です。

電子機器のまだ発達していない頃。一番大事な仕事は、職員の給与計算でした。計算機あるいはそろばんでの計算で、一人ひとりの給与を手書きし、申請します。間違えば大変なことになります。

出張旅費などは、時刻表や地図から距離を割出し、計算します。現金での支給なので、両替をしてなど、細かい仕事の連続でした。

予算を決める仕事も大変でした。教員の購入希望の教材リストの中から、教頭と予算案を討議します。そこには、多少なりとも私情が入りこみ、気に入られた職員とそうでない？との違いに戸惑うこともありました。

事務職の仕事は、いわば裏方です。電話、保護者などの訪問者の対応、管理職のお茶くみ、職員個人の振り込みや、組合費の管理、職員の個人情報と冠婚葬祭に関わる手続き、転勤のときの書類提出などなど。勤務に関わる権利の情報提供も。教員の突然の質問や疑問への対応。本当に、色々な力がついた一年間でした。

臨時事務職をしていて思っていたことですが、教員の給与明細を見て、その額は、決して高くないなあということです。校長職にでもなれば、今なら、メディアにさらされ、「申し訳ありませんでした」と頭を下げなければなりません。たくさんの「命」を預かる立場として、もう少し高額でもよいのではないかと。

とにかく、事務職の仕事を実務し理解していたことは、その後の教育現場での教員生活を大いに助けてくれるものでした。

— いよいよ教壇へ —

履歴に事務職を経験と書くと、多少驚かれます。『何でもできるんやね』と言われることがあります。いやいや偶然で、好んではいな

かったけれど、やって良かったと思える仕事だったと説明しています。

いよいよ再デビューの 때가 やって 来 ました。隣町の〇中学校からの依頼で、産休教員の代用教員。「国語科」と言うと「へーえ」と言われます。なぜか、教科のイメージがあるらしく、ごつごつした体型からよく「保健体育？」と。怒ると保健体育の先生に悪いので、聞き流しています。

30年前と言えば、学校の荒れがおさまっていない頃です。勤務した年に、兵庫県での高等学校校門圧死事件が起こりました。勤務校の〇中学校でも、朝の生徒指導と称して、校門の前に教師が立ち、チャイムと共に、あの重たい鉄の扉をガラガラと閉めていました。そこへ、遅刻を逃れようと自転車に乗った生徒、走って入ってくる生徒が、なだれ込んでくるのです。鉄の扉のすき間を狙って入り込もうとするのを、教師がカーブ閉めようとする。今から考えても、とても恐ろしいことをしていたなと思います。しばらくして、校門でのチェックはなくなりました。

— 試される教員、試す生徒 —

今でも学校現場は、特殊だなと思います。誰に縛られることもなく、私塾で学習を提供してきた者にとっては、学校現場の様々なルールに疑問符ばかりでした。慣れは恐ろしいもの、今なら「わかる、わかる、それもありかな」と思ってしまうが。

勤務初日、学年主任から「ここは塾ではありません。公的な教育を行う場所なので、気をつけてください」と言われました。塾講師であったことの情報伝わっていたのでしょう。

今の教員は、「学力不振なら塾へ行かすのも一つの選択支ですよ」と普通にアドバイスします。当時は、塾は敵対視されていた雰囲気があったようです。教師としてのプライドのようなものも感じられました。

団塊世代の子どもたちが思春期のころです。クラス数も多く、1000人近くいたと思います。まず驚いたのは、常時生徒指導が必要だということです。空き時間は、廊下、トイレ前での喫煙監視。トイレの入り口の扉は外されています。何より一番嫌だったのは、教師の車へのいたずらでした。当時私は新車を買ったばかりで、ひやひや。プレートを折り曲げるのは、まだ許せますが、ボンネットを飛び跳ねるなどは許せません。毎日のように、「〇〇先生の車修繕代寄付のお願い」が回っていました。上階から窓枠が落ちてくるのなんて、珍しくありませんでした。何とも、久々の学校復帰がこのような状態

とは…。生徒も教師もエネルギーギッシュだったなと思います。

そんな荒れの中で、「国語」を教えるのは、なかなかの苦勞でした。しかし、色々なことを経験させたかったので、学校を出て、生徒たちと共に散策しながら短歌を作るといったこともしました。それを提案した時は、学年の担任団から猛反対されました。逃げたらどうするんだとか、近隣でトラブルを起こしたらどうするなど。（その時は辞めようと…）しかし、子どもを信頼し理解していると、意外にはめを外さないものだということが分かりました。その時の教え子とは、今でも年賀状のやりとりをしています。

そして、忘れられない生徒がいます。むかし、「登校拒否」と言われたMさん。

つづく